



読書としての戦争体験 : 井上光晴「ガダルカナル戦詩集」と戦中派の思想

梶尾, 文武

(Citation)

國文論叢, 49:1-17

(Issue Date)

2015-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81011667>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011667>



読書としての戦争体験

——井上光晴「ガダルカナル戦詩集」と戦中派の思想——

梶 尾 文 武

一

奥野健男は、井上光晴の小説集『ガダルカナル戦詩集』（未來社、59・3）の刊行に際して著した書評のなかで、かつて彼の短篇小説「一九四五年三月」（『近代文学』52・2）を読んだ際の感慨を振り返り、「井上光晴こそ、ぼくたちの世代のかけがえのない作家だ、という胸の中を突き上げてくるような親愛感をおぼえた」と述べている。

ここで奥野の言う「ぼくたちの世代」とは、昭和初年前後に生れた世代、すなわち戦時下において青春を迎え、戦争に自己の実存を賭した戦中派世代を指す。奥野は続けて次のように書いている。「ぼくはこの作品ではじめて、ぼくたちと同じ戦争体験を経た作家を知った。ぼくたちの世代の戦争期の精神状況が、はじめて文学の世界に描かれているのを見出したのだ。それまでぼくは、ぼくの体験し、知っているような、戦争下の精神状況が描かれた小説に一度も出会わなかった。多くの作家が、戦争についてたくさん作品を書いているが、どれもこれもぼくの感じていた

戦争とは違っていた。みんなその当時から、戦争に対しては批判的であり、積極的に反対運動をしないまでも、根本的に厭戦的であったり、傍観的であったり、自己打算的であったり、ニヒリステックであったりする立場から描いている。確かにそういう人もいたのだろう。しかしそういう人でもそれが心の全部かと言えば、決してそうではあるまい。あの時、民族主義的、集団的なムードに巻き込まれなかった日本人は殆んどいないと思う」。

植谷雄高、野間宏らいわゆる「第一次戦後派」の作家たち、あるいは平野謙、本多秋五ら「近代文学」派の批評家たちが、昭和初年代にマルクス主義を通過したがゆえに、戦争に対して「傍観者的」、「厭戦的」もしくは「自己打算的」な態度をとることができたのとは対照的に、皇国思想あるいは聖戦思想のなかで自己形成を遂げた戦中派世代は、戦時下にあつてはその時代精神を相対化する術を持たなかった。奥野健男が世代的共感をもって井上光晴の作品に見出したのは、戦時超国家主義を絶対の精神的支柱として生きた勤皇青年たちの青春である。

戦後派文学＝戦後リベラリズムの文壇の覇権は、六〇年安保闘

争に前後して、井上や奥野ら戦中派世代による異議申し立てを受けて後退した。その動向を決定づけたのが、吉本隆明と武井昭夫の共著『文学者の戦争責任』(淡路書房、56・9)を嚆矢とする、戦時知識人の戦争責任論である。この文脈で『高村光太郎』(飯塚書店、57・7)を著した吉本隆明は言っている、「ことに、戦争に抵抗したという世代があらわれたときは、驚倒した。もし、そういう世代があったとしたら、どうしても戦争期に出遇うとか風聞をきくとかすることがあってもよかつたはずだ」と。「傍観とか逃避とかは、態度としては、それがゆるされる物質的特権をもたにしてあることはしつていたが、ほとんど反感と侮蔑しかかんにしていなかつた。戦争に敗けたら、アジアの植民地は解放されないという天皇制ファシズムのスローガンを、わたしなりに信じていた」²⁾。ここには、戦争を正義として信じていることなく傍観した前世代に対する怒り、戦時の「大衆」を度外視したまま戦後に覇権化した進歩的知識人の近代主義^{モダンニズム}に対する怒りが漲っている。

一九五八年一月、奥野健男は、井上、吉本、武井のほか、橋川文三、鮎川信夫ら同世代を代表する文学者たちを糾合して同人誌『現代批評』を創刊した。吉本による「戦争に抵抗したという世代」に対する批判は、その創刊号に掲載された「転向論」にとどめをさす。昭和十年前後にマルクス主義から離脱した知識人について、権力による弾圧よりも「大衆からの孤立(感)」が最大の条件であつたとするのが、わたしの転向論のアクシスである」とする吉本は、宮本賢治・蔵原惟人ら「獄中非転向組」を、大衆から孤立していることへの自覚を欠いた「日本的モデルニズム」の典型として指弾する。「かれらの非転向は、現実的動向や大衆

的動向と無接触に、イデオロギーの論理的なサイクルをまわしたにすぎなかつた」。こう論じて戦後の言説空間を制覇していた非転向者の脱神話化を敢行した吉本が、六〇年前後に最大の論敵として見定めたのが、戦後前衛の総帥たる批評家・花田清輝であつたことは、周知のとおりである。

一九五〇年代前半における井上光晴の作品群は、日本共産党の横暴を内部告発した「書かれざる一章」(『新日本文学』50・7)を皮切りとして、主に戦後革命運動からの転向問題を主題としていた。しかしその作品の主題は、五年のいわゆる六全協以降、彼が敵対してきた党の権威が失墜するなかで次第に別の方向へと移行してゆく。奥野健男が共鳴したという「一九四五年三月」(単行本『書かれざる一章』近代生活社、56・8所収時に「双頭の鷲——一九四五年三月」と改題)にすでに予告されていた方向、すなわち戦中への廻行である。

一九五八年、『ガダルカナル戦詩集』(『新日本文学』58・5)を著した井上は、『現代批評』創刊号から三号(59・4)にかけて『虚構のクレール』(未来社、60・1)の第一章を掲載している。この時期にはじまる、同時代から戦中へという井上作品の題材の廻行について、丸川哲史は「井上の文壇上のポジションは、第一次戦後派による戦争叙述がひとつのピークを越えた時期において、その後(戦争叙述)を引き継ぐレール上に設定されたということになる。その後の井上の叙述は、むしろ「戦後」の混乱を回避しているようにも読める」と評価している。しかし井上と同世代の論者は、彼の作品における戦中への廻行を概ね肯定的に迎えた。たとえば武井昭夫は井上の方向転換について「決して主

題の後退を意味するものではなかった」としたうえで、「井上は自己の『戦後』の原型を、自己の『戦争』の原体験のなかに探ろうとしたのである」と論じている。すなわち、「戦後」を「戦争」との断絶としてとらえることによって、自己の日本の暗黒部分＝腐食部分を放置したまま出発しようとした姿勢を否定し「戦争」を自分の文学によって再通過しようとした。『戦争』と『戦後』とに連続性をさぐることに於いて、安易に戦後にもちこしていた自分のなかの『戦争』を止揚する文学の実験にかれはとりくんだのである⁽⁴⁾、と武井は述べる。

ここで武井の言う「原体験」とは、井上光晴を論ずる者が、また井上自身が、彼の文学を語る上でしばしば持ち出す鍵概念である。武井は「戦争」を井上の「原体験」として位置付け、「戦後」に回帰するそれを止揚する試みとして「ガダルカナル戦詩集」以下の作品群を捉えている。武井の論を敷衍して言えば、井上のその試みは、「戦争」を清算済みのものとしてやり過ぐすことで「戦後」を謳歌してきた前世代の知識人に対しての、異議申し立てを意味している。

さらに吉本隆明は『虚構のクレール』に寄せた書評において⁽⁵⁾、この作品を「戦争世代が文学作品としてうみ出した戦争体験の最大の記念碑」と呼び、その作者井上を「言葉のほんとうの意味で戦争世代にぞくする作家」と評している。ここで言う「戦争世代」とは、吉本自身がそうであったように、「戦争と天皇制を、現実体験とイデオロギーの双方から骨身に刻みこまれながら、もがきたたかった世代をさしている」。さらに吉本はこの作品に「戦争世代がもっている前世代に対する優位性」を看取り、同

時代の言説空間において、戦争世代＝戦中派が戦後知識人から覇権を奪回したことのメルクマールとして本作を定位した。

井上に対するこのような評価は、吉本や武井が彼の実作に先駆けて展開してきた戦争責任論の理路にぴったりと重なり合っている。彼らの言説提起は、井上がその小説作品において戦争という原体験へと遡行するための地ならしをしていたのであり、むしろ情況に即妙に応じえたこの小説家の機敏さにこそ注目すべきであろう。その機敏さは、最初の著作集『井上光晴作品集』（全三巻、勁草書房、65・1・6）各巻の巻末解説からも窺われる。この解説をみずから執筆した井上は、各作品をとりまく言説環境を参照しつつ、武井昭夫、鶴見俊輔、平野謙らが自作に寄せた批評文の多くをそのまま引用しているのである。

井上が実際に戦争をどのように通過したか、つまり彼にとって戦争という原体験が現実的にどのようなものであったのかは、ひとまず括弧に入れよう。問題は、彼の作品に表出された原体験としての戦争の内質である。それを明らかにするためには、作中に登場する青年たちがどのような体験として戦争を通過しているかを見極める必要がある。本論は、一九六〇年前後に噴出した十五年戦争をめぐる言説を踏まえながら、その磁場のなかで出現した井上光晴の中篇小説「ガダルカナル戦詩集」に照準し、一連の作品群の基層をなす戦争という原体験に接近するための試論である。

二

一九六〇年前後の井上光晴の、戦争体験を主題とする中篇小説群には、ある共通した特質を見出すことができる。それは端的に

言えば、叙述の錯綜である。戦争末期の長崎を舞台とする「ガダルカナル戦詩集」の冒頭部は、井上の作品群におけるそうした叙述の特質をよく示している。

英一さーんこれなんとよむの、英一さーんこれなんとよむの、といつどこかの壁をみつめているような眼をしたクニ子が「さーん」という言葉に長い尻上りの抑揚をつけていった。凄烈な任少佐の気魄に、ドレズドフ参謀は目くらむような意外な動揺を感じた。——中国人にも、このような決死の意気があるのだ！拳銃をもつてする脅迫も、この中国人の決意を動かし得ない！むしろ感動して拳銃を引こうとした時、ドレズドフ参謀は、砲塔の上に重く鋭い響きを聞いた。撥ねかえる敵弾の命中ではない。ガンガンと上から碎くような打撃的な響きだ。と声を出して読んできて、そのあとをきいているのである。クニ子は野沢英一に何か話しかけてもらいたい時、必ずきまつて自分がよんでいる小説本のつづきの部分をきくのであった。いまにも色のついた唾液がこぼれおちるのではないかと思われるような、だらりと半分ほどひらいた唇を、拭きなさいと手まねでいつてから、英一は読んでやった。「ドレズドフ！」任少佐が喘ぎこんで喚いた。「日本兵だッ、砲塔に登って来とる！」「オオッ?!」ドレズドフ参謀は愕然として立ちすくんだ。ガンガンと殴りつづけて砕くこととする。何とした日本兵の勇敢さだ！ドレズドフ参謀は、今まで任少佐を脅迫していた拳銃を、いきなり引いた。……ルビがふつてあるのでクニ子には全部よめるはずだ、という思いがいまいまして英一の頭をかすめたが、彼は黙っていた。

冒頭に引用符抜きで唐突に配された、「英一さーんこれなんとよむの、英一さーんこれなんとよむの」という呼びかけは、クニ子という名の少女の声である。続く「凄烈な任少佐の気魄に」から「打撃的な響きだ」までの条りは、クニ子が音読する「小説本」の一節である。長崎経専の学生・野沢英一は、姪にあたるクニ子にせがまれて、「ドレズドフ！」任少佐が喘ぎこんで喚いた」以下の条りを音読する。地の文は英一の内面に焦点化しながら、これら複数の帰属先をもつ言葉を、引用符によって区切ることなく配列し統御している。

この冒頭部において、叙述に錯綜を与えている最大の要因は、「小説本」というテクストからの引用である。叙述はまもなく、この「小説本」が「ノモンハン戦秘史」という副題をもつ山中峯太郎の小説『鉄か肉か』（誠文堂新光社、40・7）であることを明らかにする。その説明を借りれば、「昭和十四年五月から八月に至るまで戦われた凄惨な日ソの激闘を主題にした」軍事冒険小説である。野沢英一は、クニ子と読んだ「皇軍の将兵がモスコウ戦車士官学校出身の中国人将校とソ連参謀に拳銃で射殺される場面」に「すでにこういう描写は自由思想ではないのか」という疑いを抱き、続けて次のような思いをめぐらす。

むしろその小説は圧倒的なソ連戦車群に身を挺して砲塔をハンマーで打碎く日本軍将兵の血闘と勝利を結末としているのだが、その根底に強く流れている物量には物量という思想が、何かひどく絶対的でないもの、「反万葉的な」思想に結びつくという気がしたのであった。英一はすでにその『鉄か肉か』を四年半前、その本が刊行された直後、昭和十五年の夏

休みに読んでいたが、当時中学二年の級友の間でこの小説はエロ本代用の意味と価値で流行し、彼もまたそのように利用したのである。

ソ連軍の「鉄」＝戦車攻撃に「肉」＝肉弾戦をもって応じ勝利した日本軍を称える『鉄か肉か』は、陸軍の三人の現役将官が寄せた序文のなかに「惟ふに如何なる科学的、技術的創始も又精巧なる機械の運転も、此れを爲すもの最後の鍵は人にある。強大なる意思力、至高なる精神力、而して這の物心一如の貫徹は世界無比なる大和魂によつてこそ解決せられねばならぬ」といった言葉が読まれるように、軍部も認める戦威発揚のプロパガンダとして流布していた。しかし野沢英一は、この小説にむしろ「物量には物量という思想」、つまり西洋近代との戦いを、西洋近代の論理をもつてする背理を見出し、これを「反万葉的」と呼ぶ。英一はそうした反感を抱く一方で、この書物を「エロ本代用」として利用していたのである。

勤皇者たる野沢英一が『鉄か肉か』に「反万葉的」な思想を嗅ぎ付けるのは、この作品自体がそう読まれうる内容を含むからである。将官たちの賛辞とは裏腹に、一見すると戦争を賛美する書物のうちに、「反万葉的」な、あるいは「エロ本代用」にすらなるようなメッセージが内包されている。「ガダルカナル戦詩集」は読者たる作中人物の眼を通じて、公定的には封じられたこのようなメッセージを解放し、戦争賛美の文脈によつて一義的に決定された戦時下の読み物から多義性を奪い返す。作中に配された読み手が、皇国イデオロギーにまみれたテキストからそれを内破するものを掴み出しているのである。本作における叙述の錯綜は、

単にテキストの引用によるばかりでなく、引用されたテキストの意味解釈の錯綜に発している。

さらに言えば、野沢英一のこのような本の読み方は、彼の勤皇思想が必ずしも国家への恭順を意味しないことを物語っている。本作は『鉄か肉か』の序文を引用してはいないが、この本を手にとった英一は、そこに見られる陸軍将官たちの賛辞を目にしたはずだ。いかに軍部がその「世界無比なる大和魂」を公的に宣伝しようと、彼自身はみずからの尺度に照らしてこの小説本を「反万葉的」なものとして受け取っている。彼の勤皇の精神は、国家という中間機構の教導とは無関係に、彼個人と天皇との関係において形成されている。こうした直接無媒介な天皇帰一への信念こそが、「万葉的」と呼ばれるのである。

英一が所属する長崎経専内の「万葉研究会」は、「地元における反万葉的精神を摘発し撃滅する運動」を展開している。彼の信ずる「万葉的」なるものとは、戦時下の青年のエートスを指し示すひとつの符牒であった。保田與重郎は『万葉集の精神』（筑摩書房、42・6）において、「万葉集の示す古典精神の眼目は、草莽の歌と、草莽の心情の詩の論理が、皇神の道義に参ずるさまである」と語っていた。「わが古典の示した草莽の論理は、内外の何の権威にも支へられず、わが内の神の権威に参ずることによつて、皇神の道義を己が心に燃やす」と。野沢英一をはじめとする、「ガダルカナル戦詩集」に登場する青年たちは、保田のいわゆる「草莽」、すなわち「わが内の神の権威に参ずる」青年として造型されている。

野沢英一は、一見すると徴兵忌避を目的とするような行動を日

課としている。「彼は制服である国民服乙号の上衣を脱ぎ、メリヤスシャツを下からまくり上げて裸の胸をあらわにした。そして金槌を振子にして一回大きくゆさぶり振ったのである」。彼はこうして、自分の胸に「大きな紫の痣のようなもの」を刻みつける。

徴兵検査の二カ月前から六十日間毎夜自分の手で打撃を加えたいつも生白い汗の匂いのする胸がそこにあった。彼はその手を「黒い勤皇」と自覚していたが、その「黒い勤皇」の手が密封した思想の上をずると匍いまる。彼はその行為を決意してから、固く自分の心のある部分を密閉してしまったのである。密閉した部分とそうでない部分——そうでない部分が密閉した思想を「黒い勤皇」とよび、その手が動くとき、彼は魂の内部の片一方の眼をつぶった。

英一のこの行為について、磯田光一は「やがて来るであろう徴兵という運命によって、彼は内部に宿るエゴイズムを自覚するが、しかしまた、そのエゴイズムはどこまでもエゴイズムであり、時代の課した当為を前には単に恥ずべきものにすぎない」と解釈する。だが、英一は徴兵を忌避するその行為について、恥や疾しさといった感情を抱いてはいない。「金槌がくるくるとヤナギ紐を軸にしてコマのように舞う。丙種でもすぐ招集されるかもしれないのだ、肋膜くらいでは駄目かもしれないのだ、という密閉した恐怖を軸にしてコマのように舞う」——英一の徴兵への「恐怖」はこのように説明されるが、その行為に関しての心理的な説明はなされていない。彼はその行為を感情として受け取る前に「密閉」してしまっているのだ。

野沢英一は、死への恐怖に促されたその秘密の行為のなかに

「勤皇」への道を見出そうとしている。彼は「黒い勤皇」という思想をひとつの護符として、その行為に伴うべき感情を押し流し、みずからに生への逃避を許すのである。ここで露わになっているのは、彼自身の信ずる思想と、彼のなしている行為との矛盾である。行為に現れたものを彼の思想と見るならば、彼の「黒い勤皇」とは、むしろ「国賊」と呼ばれるに相応しい。しかし、勤皇者たる彼は、「国賊」としての自分を肯定すること、おのれの反戦的な行為を内面に受け容れることができない。「青く見えない痣のついた彼の胸の中に、「黒い勤皇」とかいた旗が一本ゴボツゴボツと音をたてて舞っている。ヤナギ紐の振子をうけとめる彼の掌が思い切つて離れると、平べったい国賊の胸がそのような音を立てるのである」。野沢英一の「黒い勤皇」はこのように、一貫して内的感情として説明されるのではなく、詩的な影像としてイメージ化されている。その矛盾した行為は、恥や疾しさとして内面化されるのではなく、言葉にならない「痣」として彼の身体に刻印されるのである。

三

「ガダルカナル戦詩集」の中心に配されるのは、野沢英一の友人・久保宏の出征に際しての壮行会である。久保宏は被差別部落に生れ、野沢英一にさえそのことを隠している。「部落」出身の秘密は完全に保たれていたが、彼はその痣から逃れることはできなかった。島崎藤村の『破戒』をすすんで読書会でとりあげたのも彼であった。久保宏をとらえる被差別者としての「痣」は、野沢英一の胸に刻まれた「痣」と照応するステイグマである。

壮行会の場面では、主たる視点人物は野沢英一のもう一人の友人・倉地杉夫に交替する。倉地杉夫は、大正期のヒューマニズムのなかで自己形成を遂げた世代に属する父を持つ。しかし、「大東亜戦争が勃発すると同時に、それらすべての「人間的なもの」とヒューマニズムは一挙にあえなく崩壊し去った」。兄が出征したのち父は嫂と密通し、そのことを知った倉地杉夫は父に体现されるヒューマニズムの欺瞞に対して嫌悪を募らせている。

久保宏の壮行会には、野沢英一と長崎医大に学ぶ倉地杉夫のほかに、同じく満一九歳の活水女子専門学校生の戸田みゆき、川南高等造船学校学生の西本晋吉、さらに上の世代に属する英一の姉・渡部道子、長崎経専で南方貿易史を教える笈田講師らが参加する。丸山眞男の術語で言えば「亜インテリ」⁸⁾に属するこの面々は、読書会を開催し、島崎藤村、夏目漱石、中川与一、浅野晃、長塚節などを読んできたという。こうした読書行為による連帯のなかで、野沢英一は久保宏に自身の愛読する『佐久良東雄』という書物を手渡す。

「本当に貰っているのか、大切にするよ、一生懸命よむけんねえ」久保宏はいった。

「ほう、佐久良東雄ですか」笈田講師は久保宏の手の中をのぞくようにしていった。

「笈田講師に佐久良東雄の精神がわかってたまるもんか」と倉地杉夫は思い、「足利の、醜の奴を真二つに、切りて屠らば、うれしくありけむ、佐久良東雄」と低い声で朗詠した。

佐久良東雄は、土浦の善応寺で住職を務める傍ら水戸学を学んだ後、江戸で平田篤胤に師事し、桜田門外の変に連座して獄死し

た歌人である。戦時中には、望月茂・高橋梵仙・住井すゑ子など、歴史家や作家がこの人物についてプロパガンダ的な要素の色濃い評伝を相次いで刊行した。たとえば住井は、その評伝の後記に「歟を捨て、学問の道に入り、思想の世界に入つても、東雄のうちに農民精神は些かも褪色変質することなく、江戸の獄に瞑目する今はの際にも、一杯の水に対してなほ天の賜物と感謝する土の子たらしめたのであつた。今日、大東亜決戦下の常陸野に、僅かばかりの土を耕しつゝ、我もまた国を守るをみな子と、いさ、かのはこりを持つてこれをするす次第である」¹⁰⁾と記している。著者は定かでないが、『佐久良東雄』を野沢英一が久保宏に託すのは、この歌人が、農本主義的な土着性を組み込んだ勤皇思想、英一身の言葉でいえば「万葉的」なるもののひとつの象徴としての意味をもっていたからである。

倉地杉夫は、野沢英一と久保宏のやりとりに笈田講師が口をはさむと、「佐久良東雄の精神がわかってたまるもんか」と反発する。繰り返し込み上げてくる笈田講師への反発は感情の域を出ないが、倉地杉夫はそのことをよく自覚している。

笈田講師の舌が二つに割れている。「こいつは偽物だ、勤皇でも佐幕でもない」という感じがつつと倉地杉夫の横っ腹のあたりをとんだが、彼はその感じをすぐ打消した。自分でも曖昧にしかその理論が掴めなかったからである。

ここで浮き彫りになっているのは、それぞれの作中人物が属する世代間の対立である。三五歳の笈田講師については、「日支事変が勃発する前年か前々年、東京商大を出る前後に左翼運動に関係したという噂」があるという。彼は青年期にマルクス主義を経

験し、リベラリストとして戦後の言説空間を領導した「転向世代」に属する人物である。

この人物と同世代に属する本多秋五は、本作所収の小説集『ガダルカナル戦詩集』にレビューを寄せている。そこで本多は、戦中派世代による「自分たちの青春をいちがい否定するのではなく、かけがえのない自分の青春の意味を捉え直そうとする努力」を本作に認めた上で、「なぜ倉地杉夫の主観だけをかくも作者が甘やかすのか」という疑念を呈する。本多が問題視するのは、たとえば次のような叙述である。

それ到现在まで、倉地杉夫は不用意に警察のことを「奴ら」といつたのだが、その「奴ら」といういい方が倉地杉夫には何か異常な、笈田講師らしからぬものに感じられたのである。警察を「奴ら」と呼ぶいい方は明らかに危険思想であり、何かしら笈田講師の身にそぐわぬものと思えたが、奇妙なことに倉地杉夫はその「奴ら」という言葉をきいてふたたび笈田講師を許すという気分が襲ってきた。

本多は右の叙述について、倉地杉夫が抱く笈田講師への好悪の気分に対して「手放し」であると指摘する。つまり、「あたかも倉地杉夫の主観は作者が昔いだいた主観であって、当時のウラが何もかも見透かせる現在でもなおそのウラにだけは光線がよくとどかぬかのである」。作中の倉地杉夫は、当時の作者自身がそうであったように、皇国思想を疑いなく信じる純粋な勤皇者である。しかし現在、敗戦を通過した作者は、この青年の誤謬を見透かし、その信念を相対化しうる位置に立っているはずである。ところが、作者井上は自身の「昔いだいた主観」を相対化する視

点をもたず、その主観を代行する倉地杉夫の「専断」を許す。そのためにこの作品は「特殊という限界のなかにとどまるものであって、まだ地方性を脱しない」と本多は批判するのである。

本多秋五はこのように、作者井上が戦後の現在にありながら戦中の青年たちの主観に密着し、その適及的な対象化を拒否していることを批判している。しかしながら、「ガダルカナル戦詩集」をもって嚆矢とする井上の、戦争体験の虚構化という試みの核心は、「戦争」から断絶された現在の認識をもつて当時を裁くとは別様の仕方、戦時における国家公定のイデオロギーの欺瞞を暴くところに存している。どういうことか。

読書会の参加者たちは、会の営みを「世界観を戦争遂行に向って再編成する実践行為」と位置付けてきた。ところが、会は反戦的との疑いで警察に睨まれ、解散すべきかどうかが議論になる。及び腰になる笈田講師とは対照的に、青年たちは自分たちを敵視する警察に疑問を感じ、会の継続を望む。

「何かあるとみられるんですか、読書会をやると」皮肉でなく倉地杉夫は本気になってきた。

「いや、別にどうみられるかということではなくて、いまの状態では読書会をやること自体に問題がある、そういうふうになってきたんですねえ」笈田講師はこたえた。

「どうしても分かんないなあ、おれたち勤労動員をサボっているわけではないし、作業の合間に勉強するのがどうして悪いのかなあ」西本晋吉は意外そうな顔をした。

「おれが兵隊に行つてからも読書会は続けたほうがいいなあ、そうでないとみんなバラバラになってしまうからね」久保宏

はいった。

鶴見俊輔は、「ガダルカナル戦詩集」に召喚された笈田という年長者に注目して「この大学講師によって、井上光晴はある種のあいまいな自由主義者、知識人を描こうとしている」と解釈する。「佐久良東雄の精神」を自己の絶対的な支柱として生きている世代に属する倉地杉夫は、それを様々な思想のひとつとして享受しえたりベラルな前世代に反発している。「こういう問題が、現在の吉本・花田論争の底にある一つの感情的な対立と考えていい」。このように述べる鶴見の見立てによれば、作中人物の対立は、吉本・花田論争に代表される、六〇年前後の言説空間に噴出した世代間対立と重なっている。

鶴見は一九五〇年代半ばから、吉本隆明「転向論」に呼应しつつ、思想の科学研究会を拠点に戦争責任問題へと接近していた。十五年戦争下の思想に関する鶴見の構えは、思想する者の抽象的なイデオロギーやエコールへの自己同化ではなく、「行動の形にあらわれ得るものが思想の意味だ」というプラグマティズムに貫かれている。鶴見はそうした視角から、「佐久良東雄」のような書物しか読めない青年が「一義的に軍国主義者、ファシスト、超国家主義者、反動思想家になるでしょうか」と問いかけている。読書会に集う青年たちは、「世界観から言えば、日本が正しい国になって、正しい戦争目的のために終りまで戦い抜くために勉強している」ところが「そのことを徹底してゆくためにやっている自発的な行為、結社を自発的につくること」が戦争下では警察から睨まれるような仕組になっていたわけで、官僚機構や警察と当然に対立する」と鶴見は言う。つまり、「佐久良東雄の詩歌のよ

うなものを読んでいるというその行為のなかに、ほんとうに自分の考えや感情というものを託して、自由に動かすことを通して、いついかなる時でも少年たちはゆつくりとまた何段か屈折することとはあっても、より大きな正義に向かって道を見付けることができる」と鶴見は解釈し、そこに本作のモチーフを見出すのである。

鶴見も指摘するように、「ガダルカナル戦詩集」の青年たちが体現するのは、書物に蔵されたイデオロギーと、その読書体験が導く思想とが必ずしも順接せず、むしろ対立関係さえ構成しうるという事態である。彼らはそれぞれ勤皇精神を説く書物のなかにみずからの「正義」を見出した結果、国家の意志に背反し、警察権力による排斥を被ることになる。このとき露わになるのは、青年たちのそのような「正義」を受け容れない、国家に公定された勤皇イデオロギーの欺瞞性である。そしてここには、青年たちの「正義」が勤皇主義の内在的徹底において到達された思想態度であるがゆえに、戦時の公定的イデオロギーに対しては、リベラルの立場をもつてする外在的な否定以上に批判として力を持ちうるという主張が含まれている。本作はこうして、戦争を思想形成の契機とし、戦時イデオロギーに対して最も力ある批判を提起しうる世代が、それを内在的に体験した戦中派世代のみであることを宣言するのである。

四

読書会が警察から睨まれたのは、会のメンバーである浦川節子が、「医大看護婦養成所内の俳句会」に参加していた沖富枝の友

人だったことによる。この俳句会は、万葉研究会の告発を受けて「厭戦思想を伝達したという理由で検挙された」という。野沢英一は、俳句会に加わった阪口という医者の句集を所持している。この句集が実在のものであるのか、偽書であるのかは定かでない。

「医者？」と倉地杉夫はきいた。

「うん医者だ、そうかいである……読むよ。大東亜戦争以後の分をよんでみるよ。……黒潮くらし魯迅選集を手にしたる高校生よこれ大陸の駅にいる これは勤労隊のことをうたつたものだ。勤労隊原色の土産買いかえる というのもある。夜の壁には交響曲を廃墟と聴く 苦力みんな咳して流れる街あり 苦力昇天くらい鉛の街である 神々は死し一隻の船くだる 葬列がゆく困憊の天のもと 海も河もしんと凍りわが喪章 ひと葬りぬ氷片浮ける蒼海のほとり 黄沙のもと流離の人らくちづけあう……まだいくらでもある……」野沢英一はまるでそういう厭戦句を嬉しがっているのではないかと錯覚するような、自分が作ったような調子でよんだ。

野沢英一がこれらの「厭戦詩」を「自分が作ったような調子で」読むのは、俳句会を万葉研究会が敵性思想として摘発したこととの矜持によるばかりでなく、これらの句が自身の秘せられた「黒い勤皇」に知らず知らず通じているからでもあるろう。彼の朗詠を聴く読書会のメンバーは、一度はこれらの意味について「戦争に反対しているのかしら」と納得する。しかし、倉地杉夫が次のような違和感を提起するところから、その解釈は揺さぶられる。

「野沢、さっきお前がよんだ反戦句は、何か追いつめられたようになつて作つたんじゃないかなあ」倉地杉夫はふつと

いった。

「え、どういう意味」野沢はびつくりしたような顔をあげた。「いやよくおぼえていないが、何か、葬列とか喪章とかあつたらう。黄沙のもと何とかつていう、やりきれんような感じのものが……」自分でも意外に思える言葉が後から後からでて、どうしてそうなつたのか、何かひどく收拾のつかない気分のまま、倉地杉夫の口だけがべらべらと動いた。

続けて倉地杉夫は「野沢何というかな、何というかな」と、自分の考えるところを言いあぐねる。一義的に反戦的・厭戦的と読まれたはずの詩句に、倉地杉夫はそれとは別の「何か追いつめられたよう」なものの、「やりきれんような感じのもの」を読んでいる。野沢英一が『鉄か肉か』というプロバガンダ小説に「反万葉的」なものを見出したのをちょうど裏返しにしたように、倉地杉夫は厭戦的として摘発された俳句から、自身の共感を許しうる切迫感を読み取るのである。

このようなやりとりが続くなか、この場に参加できなかったメンバーの一人・大石克彦から一冊の詩集が届けられる。本作のタイトルに採られた『ガダルカナル戦詩集』である。本作の叙述を引けば、「南太平洋のニューギニヤとソロモン群島を大きく前方に浮かべた地球の表面を濃淡緑色の表紙にし、「前線にて一勇士の詠える」と傍題を



付したそのザラ紙の小詩集」は、日本軍が壊滅的な打撃を被ったガダルカナル戦をくぐり抜け、刊行当時はビルマで従軍していた軍曹・吉田嘉七の作品集である（図参照）。彼の詩篇は愛国詩人として知られる大木惇夫の編集のもと、一九四五年二月に毎日新聞社より刊行された。本作はこの詩集に収められた詩篇のうち「追想」「敗れたる鉄兜」「埋葬」の四編を、倉地杉夫の朗読によって引用している。たとえば「熱病にて仆れし戦友に」と副題された「埋葬」は、次のような詩篇である。

太陽は青ざめ

焼け残ったジヤングルの

たゞれたボサからは

まだ煙がよろめいてゐる。

この荒涼たる黄昏に

紙のやうに皮膚をかはかして、

病葉の散ると共に

死を選んで行つた君の生命。

すべてを捧げ切つて

肉ごとく枯れたる腕よ。

かつきと見抜いて、

暮色をうけしめてゐる眼差よ。

ああ、その飢えた手に掴んだ

激しいものは何だ。

その瞳に確信して

叫んでゐるものは何だ。

熱病といふべくあまりに熱い

悲願の中に身を埋めた友よ。

この憤りに満ちた風景の中で、

君の血こそは静かに赤かつたのだが。

応召する久保宏をはじめとして、やがて戦士になろうとしている青年たちは――朗読の最中に「黒い勤皇」と書かれた旗を幻視する野沢英一を例外として――、ガダルカナル戦の敗残兵が綴つたこれらの詩句に素朴に感動する。「ややかすれた声でよむ倉地杉夫の声の先端が少し顫え、彼等はその顫えの中に、等しく南太平洋で死闘する同胞、兄弟のこゝろを感じていた。彼らが祖国とよび、その祖国を汚す敵とたたかおうとする純粋な血が一滴一滴ずつ倉地杉夫のたどる詩の中からしたり落ちる」。ところが、詩集の第一頁に掲載された大木惇夫の序詩については、倉地杉夫が「ひとり合点みたいで、ぴんとこんね、前線で戦っている兵隊とはやっぱりどこかちがうね」と言い、西本晋吉は「序詩なんかじゃなく、本物をよめよ」と斥けるのである。

青年らが読むことさえ拒否し、したがって作中には引用されていない大木惇夫の序詩は、以下のようなものである。最初の二聯を引こう。

皇^{すめら}を慕^もひもとほる

鋭^とごろのはてしも知らに

わきたぎち、波とあふれて

詩^{うた}ごろ極^たまるところ

詩^{うた}ごろ、神^{かみ}ごろなり、

解^ときがてに通^とふくすびは

知る、知らず、おのづからなり。

厳かに国興の時

詩もまた大いに起る

神いぶき凝りて成りにし

山河の気の発するや

咲きかをる花の万枝

やまざくら空みつること

詩もまた湧きて、あふれて

珠としも地には満たを。

瀬尾育生¹⁴は、戦意昂揚詩としての広義の「戦争詩」を、逸脱現象ではなく日本近代詩の核心として位置づけ、「抒情を敵とし地方性・風土性を排斥して、テクノロジーの「世界」性に加担してきたモダニズムの方法」の完成形態と捉える詩史観を提供している。瀬尾によれば、モダニズムに起源をもつウルトラナショナルな「戦争詩」は、抒情の母体となるナショナルな共同体と結びついた狭義の戦争詩＝戦場詩とは異質である。前者は戦時下においては「愛国詩」もしくは「国民詩」と呼称されていたが、「戦後

詩」の発生に相即して「戦争詩」として一括されたという。こうした視角から吉田嘉七の『ガダルカナル戦詩集』を取り上げる瀬尾は、「ここにはあきらかに個的な内面の抒情があり、それは自分が属する共同体へ、その中心にある母へと向かっている。こうした詩こそ「ナショナル」「パトリオティック」という語によって呼ばれるべきものであって、当時「愛国詩」「国民詩」と呼ばれていたものと、その主体をまったく異にしている」と指摘し、「これらの兵士の詩が古典近代的な抒情性を維持していたのは、日々直面している自らの現実の死が、体験への「内在」ということを、不断に詩の言葉に強制したからである」と論ずる。

瀬尾の議論に即して腑分けすれば、『ガダルカナル戦詩集』に収められた吉田嘉七の詩は狭義の「戦争詩」に、大木惇夫の序詩は「愛国詩」に属していよう。「皇^{すめら}べ」、「神」、そして「国」を詠う大木の詩が、公定的な皇国イデオロギーを詩の形式に流し込み、「詩もまた大いに起る」さま、つまり愛国詩の一般的な形成それ自体を語るメタポエトリーであるのに対し、「母」、「妹」、あるいは「戦友」をいわば二人称の宛先とする吉田の詩は、それぞれに一回的な死の体験にもとづく共同性から抒情を汲み上げている。作中の青年たちが吉田の詩の言葉に共感しうるのは、その言葉が、戦場体験に裏打ちされた交換不可能な死の共同性に内在しているからである。他方、大木の詩について「びんとこんね」というのは、それが吉田の詩を支える死の体験を捨象し、彼の言葉を「皇べを慕ひもとほる」ところに成るプロパガンダとして横領しているにすぎないからである。

焼けただれた椰子の下、跳梁するアメリカ爆撃機の下で、飢

えた日本の兵隊が馬鹿と叫びながら斃れた戦友の鉄兜を抱く、
そのたたいの壮絶さと真実がほんとに泣きたいように皆の
心を搏ち、読み終えた倉地杉夫は詩集に眼をつけたまま自分
の感動を極度に抑えるような声で「よかねえ」といった。

彼らもまた吉田の詩が語るような死の体験を、自身のものとして強いられる時を迎えようとしている。詩を聞きながら、久保宏は被差別部落の出身であることを隠している自分を「卑怯」だと恥じ、倉地杉夫は「久保宏よ、元気で戦え、死ぬな」と願うが、「すぐまた「死ぬな」という思いはこの『ガダルカナル戦詩集』に対して不忠なのだ、不忠なのだ」と頭をふった。青年たちの共感にはホモソーシャルな性格を帯びたものだが、それはこのように、やがて戦士となる自分たちの未来なき未来と、これらの詩が語る死の体験とを重ね合わせるところから来ているのである。

五

ところが、浦川節子は、朗誦する倉地杉夫の声を聞きながら警察に連行された沖富枝に思いを馳せ、未来の戦士たちの共感に亀裂をもたらす言葉を投げかける。

「何か知らん、こんなにしては悪いような気がするけど、
その、倉地さんがいまよんだ詩ね、さっき野沢さんが持ってきた、養成所の事件の葬式の俳句によく似てるようね……こんなについて悪いのかしらんけど……」思い通りのことを時と場所を選ばずというのが看護婦という職業に似つかわしくない彼女の性格であったが、いまも彼女はいつてしまつてから、ひどく何か場ちがいな雰囲気を感じるように口をつぐみ、

もう一度「さっきの俳句といまの詩を一緒にして悪かったかしらんけど、なにかしらそんな感じがしたからね」と繰返した。

先にも述べたように、戦争の時代の歴史性を帯びた様々なテクストの引用のもとになる本作の特質は、引用されたテクストの意味解釈の錯綜に求められる。とりわけこの場面では、そうした意味解釈の決定不可能性が噴出している。吉田嘉七のガダルカナル戦詩と、「ひと葬りぬ氷片浮ける蒼海のほとり」といった無名俳人の反戦句とを同質なものとして並べるとき、浦川節子は、両者をいづれも公定的イデオロギーに反しない表現として読んでいる。彼女のこの発言は、戦詩の言葉をホモソーシャルな共感の依り代として独占しようとする青年たちに冷や水を浴びせるものである。これに対し、野沢英一は「アカの医者が作った反戦句とガダルカナルで戦った兵隊の歌とは問題にならんよ」と反論し、両者が異質であることを各々の作者の属性に帰するかたちで説明しようとするが、その説明は「自分でも説得力がないと感じ」ている。しかし、彼女の「よく似てるようね」という直感は、われわれ読者に対しては、戦意発揚に利用された戦争詩に潜在する、死にゆく者を悼む「反戦」的な抒情を押し開いているのではないか。

吉田嘉七の『ガダルカナル戦詩集』をめぐるこの挿話は、戦争と言語表現との関係を捉える上で、いくつかの示唆を与えている。言い換えればこの挿話は、井上光晴による戦争文学論としての射程を有している。たしかに、吉田の詩集を戦時下において開いていた言説は、大木の序詞がそうであるように皇国イデオロギーに満ちている。しかし、そのようなイデオロギーに対しての批判は、

当の吉田の詩の言葉に内在することによってしか引き出すことができない。それは吉田の詩の言葉が、公定的なイデオロギーには還元されない体験に根差しているからである。こうした視角からすれば、戦争の時代の言葉を戦後の価値観から遡及的に裁断する発想は拒否される。また、野沢英一の誤謬を通して示されるように、表現の意味を表現する主体へと還元することも同断であろう。それらはいずれも、外在的な視点から言葉を、あるいは歴史を裁くことではない。戦争の歴史から最も力ある思想を形成しうる者、最もすぐれた詩を詠いうる者は、その戦争を言葉として内在的に通過した者である——それが井上光晴の「ガダルカナル戦詩集」が提起する根本命題なのである。

一九六〇年に前後して、竹内好は、鶴見俊輔・丸山眞男らとともに『近代日本思想史講座』（筑摩書房、59・7・61・6）を刊行し、戦時期日本が戦争の歴史を思想形成の契機としえなかったことの所以を問うていた。その問題意識の結実である評論「近代の超克」（第7巻、59・11）において、竹内は中野重治の『斎藤茂吉ノオト』（筑摩書房、42・6）を「抵抗の書」と評価し、次のように述べている。

戦争をくぐらなければ、具体的にたたかっている民衆の生活をくぐらなければ、いかなる方向であれ民衆を組織することはできない。つまり思想形成を行うことはできない。それが最低限の思想の必要条件である。戦争吟を、戦争吟であるために否定するのは、民衆の生活を否定することである。戦争吟を認め、その戦争吟が過去の戦争観念にたよって現に進行

中の戦争の本質（帝国主義戦争という観念ではない）を見ることから逃避している態度をせめ、戦争吟を総力戦にふさわしい戦争吟たらしめることに手を貸し、そのことを通して戦争の性質そのものを変えていこうと決意するところに抵抗の契機が成り立つのである。

竹内の所論は、「民衆の生活」という基盤をもたないところに思想などありえないという、吉本隆明「転向論」も共有する知識人批判¹⁴近代主義批判の文脈を踏襲し、中野が考察する斎藤茂吉に「民衆の生活」に根差した戦争吟の理念型を見出している。総力戦と化した未聞の戦争の本質を直視する「決意」を汲んだその戦争吟に「抵抗の契機」を求める竹内の所論に対して、井上光晴は、「現実には戦争中、そういう抵抗を意識的に試みた文学者はひとりもおらず、むしろ「戦争吟を総力戦にふさわしい戦争吟たらしめることに手を貸し」たのは、天皇と戦争そのものを純粹に「思想化」しようとした、私たちの世代ではなかったか」と反論した。

つまり、戦争中の転向世代にとっては、如何なる方法と手段をもつても「戦争吟」は「抵抗の契機」となりえず、逆に戦争と人間の関係について、転向を知らざる世代にとって「意識しない抵抗の契機」を生みだすことができ、そしてそれは混沌とした部分の中で、体中深く潜んだのである。¹⁵

井上は、竹内好の右の議論と、それに対して提起した異論とを自身の作品集の解説に引用した上で、『近代の超克』には『ガダルカナル戦詩集』のモチーフに関連した部分がある¹⁶と示唆している。本作はこうして、作者井上自身によるパラテキストによつ

て、六〇年前後における「戦争」をめぐる言説の磁場に投げ込まれたのである。

井上は、戦後的な価値観をもとに週及的に「戦争吟を戦争吟であるがために否定する」という発想を斥ける竹内の所論を原理的には受け入れた上で、それを世代論的な視角から組み直している。井上に言わせれば、竹内が言う意味での「戦争吟」をなしている世代、つまり戦争を内在的な思想形成の契機としうる世代は、その時代精神を自己形成の絶対的な条件とした戦中派世代のみである。しかし実際のところ、彼らの世代は、戦時中にはこうした意味での「戦争吟」を具現化することができなかった。表現者として書くことに目覚めるには——同世代の作家では三島由紀夫らをわずかな例外として——敗戦時に二十歳そこそこだった彼らは未だ若すぎたからである。「そしてそれは混沌とした部分の中で、体中深く潜んだのである」という井上の所論は、戦時の読むという体験によって彼らの世代の内部に蓄積された言葉が、いわば戦争吟の種子となったことを物語っている。その種子は、モダンズムを出発点とした鮎川信夫ら「荒地」派を中心とする戦後詩の実践を経て、昭和三十年代を待つてようやく芽吹くことになる。そのひとつの現われが、三十代作家の作品「ガダルカナル戦詩集」にほかならない——井上はそう主張していると言つてよい。

私は本稿の序論部において、井上光晴のいわゆる「原体験」とは何かと問うた。作家の生前、論者の多くは彼の自作年譜に見られる二つの劇的な出来事に注目し、これを作品の基層をなす「原体験」と見做してきた。ひとつは幼年時代、旅順という外地で父母と生き別れになったという体験である。いまひとつは、長崎の

崎戸において、強制徴用された朝鮮人労働者らとともに十五歳の若さで炭鉱夫生活を送ったという体験である。戦時中のこれらの「体験」は井上の創作に強く影響したと考えられ、作品のリアリティを背後から支える要素として受け止められた¹⁷。しかし晩年、原一男監督による映画「全身小説家」（疾走プロダクション、94・9）の撮影を機に、自作年譜に記述されたこの二項目がいずれも虚偽であることが明らかになった¹⁸。したがって、作品にそれらの「体験」の投影を見出すのはいまや無意味であろう。

平野謙は、「ガダルカナル戦詩集」発表直後の時評において「その真中にすわつて動かぬのは戦争をめぐる作者の原体験というようなものである」と述べ、「何を原体験などというか。たとえば橋川文三と保田与重郎との出会いみたいなものであり、佐々木基一と『文芸復興期』の出会いみたいなものである」と指摘している¹⁹。この指摘は、ほとんど直覚的に井上の原体験の内質を言い当てている。井上の場合、保田與重郎を読んだ橋川文三の場合と同じく、その原体験とは端的に言つて、言葉を読むという文学的経験それ自体の謂いである。井上において戦争体験を主題とする作品群の序章として著された「ガダルカナル戦詩集」が、そのことを証明しているはずである。

作品の末尾、『ガダルカナル戦詩集』を手渡された久保宏は、「そんならこの詩集、持つといってくれ、皆にやるよ、読書会で時々読んで俺のこと思ひだしてくれ」と、この詩集を倉地杉夫に差し出す。このとき詩集の言葉は、出征する久保宏自身の遺言となり、彼自身の戦争吟としての意味を担うことになるだろう。作品はこうして、読むことに媒介された死の共同性を提示して幕を

下ろす。しかし詩集を遺言として託された青年たちの直後に待っているのは、より徹底的な破局の時である。やがて来るべき一九四五年八月九日、彼らの暮らす長崎には原子爆弾が投下されるからである。

本作では未だそこに到らない原爆投下による破局の時は、「虚構のクレイン」から「地の群れ」(『文芸』63・7)へといたる作品群において召喚されることになるだろう。さらに、久保宏の造型を通してその端緒がひらかれた、天皇帰一―君万民という皇国の理念に反する差別の問題も、次作以降においてより正面から扱われる。このような主題の展開のなかで、本作が提起した原体験、すなわち読書という経験は次第に後景へと退き、多くの評者の誤解を誘った自作年譜上の虚偽の「体験」にまつわる要素が作品の前景にせり出してくる。「ガダルカナル戦詩集」は、井上光晴、ひいては戦中派世代の多くの文学者が、戦争という原体験を読書体験として通過したことを、小説としては破格の引用によって示す、希少な試みであった。そこに引用された言葉には、戦時イデオロギーによる包囲を超え、それを書く者の体験にもましてそれを読むことで自己を支えた青年読者たち固有の世代的体験が刻み込まれている。そして同時に、それらの引用された言葉は、それを読んだ青年たち共感を呼び込みながら、彼らの独占には収まらないような普遍的な次元、すなわち歴史に向かって開かれて

注

(1) 奥野健男「堀田善衛著『河』」、井上光晴著『ガダルカナル戦詩

集」(『図書新聞』59・4・15)、引用は『奥野健男作家論集4』

(泰流社、78・1)、三三三五頁による。

(2) 引用は吉本隆明『高村光太郎』(講談社文芸文庫、91・2、一七〇―一七三頁による)。

(3) 丸川哲史『冷戦文化論』(双風舎、05・3)、一四二頁。

(4) 武井昭夫「戦争」止揚の文学的実験――井上光晴「虚構のクレイン」・『死者の時』が示すもの(『日本読書新聞』60・10・24)、引用は『武井昭夫批評集2 創造の党派性』(未来社、75・12)、三一頁による。この評論は、『井上光晴作品集 第三巻』(勁草書房、65・6)巻末の自作解説に一部引用されている。

(5) 吉本隆明「井上光晴「虚構のクレイン」」(『図書新聞』60・1・30)、引用は『吉本隆明全著作集 第五巻』(勁草書房、70・6)、五九二―五三頁による。

(6) 吉田豊彦「序文」(山中峯太郎『鉄か肉か』誠文堂新光社、40・7)、ルビは原文による。

(7) 磯田光一「井上光晴論――苦痛の聖性について」(『群像』68・3)、引用は『文学・この仮面的なもの』(勁草書房、69・7)、一七七頁による。

(8) 丸山眞男は、「小工場主、町工場主の親方、土建請負業者、小売商店の店主、大工棟梁、小地主、乃至自作農上層、学校教員、殊に小学校・青年学校の教員、村役場の吏員・役員、その他一般の下級官吏、僧侶、神官、というような社会層」を「亜インテリ」と呼び、彼らが「わが国の場合ファシズムの社会的地盤となっている」とした上で、「都市におけるサラリーマン階級、いわゆる文化人乃至ジャーナリスト、その他自由知識職業者(教授とか弁護士とか)及び学生層」といった(真正)インテリゲンチヤは「むしろ気分的には全体としてファシズム運動に対して嫌悪の感情をも

ち、消極的抵抗さへ行っていたのではないか」と述べている（『日本ファシズムの思想と行動』『東洋文化講座』第2巻、白日書院、48・5）。

- (9) 望月茂『佐久良東雄』（大日本雄弁会講談社、42・11）、高橋梵仙『佐久良東雄』（新興亜社、42・12）、住井すゑ子『尊皇歌人佐久良東雄』（精華房、43・2）。

- (10) 住井すゑ子『尊皇歌人 佐久良東雄』（精華房、43・2）、四四三頁。

- (11) 本多秋五「井上光晴の苦境——『ガダルカナル戦詩集』」（『新日本文学』59・6）

- (12) 鶴見俊輔「転向研究の方法」（武田清子編『思想史の方法と対象』創文社、61・11、七五・九四頁）。この評論は、『井上光晴作品集 第二巻』（勁草書房、65・3）巻末の自作解説に一部引用されている。

- (13) 鶴見俊輔『北米体験再考』（岩波新書、71・8）、一六七頁。鶴見はこの命題を「プラグマティズムの中心となるプラグマティックス・マキシム」と呼んでいる。

- (14) 瀬尾有生『戦争詩論 1910-1945』（思潮社、06・7）、九一—四三頁。

- (15) 井上光晴「三十代作家の『近代化』の内面」（『思想』63・11）、引用は『幻影なき虚構』（勁草書房、66・6）、二一—二二頁による。竹内好はこの井上の論文について、「批判の鋒先が鈍い。私が中野重治を弁護したように受けとっているが、私の真意はそうじゃない」と述べ、「いずれにせよ、この程度では受けて立つわけにいかない」とコメントしている（『日記抄』『みずす』64・1、引用は『竹内好全集 第一六巻』筑摩書房、81・11、四六六頁による）。

- (16) 井上光晴「解説」（『井上光晴作品集 第二巻』勁草書房、65・

3）、三四—三五八頁

- (17) これら二つの年譜上の出来事に注目する井上論は、枚挙にいとまない。たとえば白川正芳は、「私は年譜をみながら生い立ちや環境、成長の過程、作家・批評家となる経緯などを空想するのが好きで二、三の人の年譜を作成したりしたが、井上光晴の場合は——これは敬意をこめていうのだが——何度読みかえしてもあきることがない。ことに作家となるまでの年譜は見事な軌跡という他ない」と述べている（『井上光晴論』『現代の文学 24 井上光晴』講談社、72・10）。

- (18) 井上没後に明らかにになった事実にもとづく年譜は、井上光晴『十八歳の詩集』（集英社、98・3）に収録された、川西政明編『井上光晴年譜』を参照。同書には井上による自作年譜も収録されており、比較対照が可能である。

- (19) 平野謙「文芸時評」（『毎日新聞』58・5・25）。この評論もまた、『井上光晴作品集 第二巻』（勁草書房、65・3）巻末の自作解説に一部引用されている。

* 本稿は、韓国日本研究団体第二回国際学術大会における研究発表「虚構としての戦争体験——1960年前後における井上光晴の中篇小説」（於嘉泉大学校、二〇一三年八月）をもとにしている。コメントをいただいた方々に感謝したい。「ガダルカナル戦詩集」本文からの引用は、いずれも『井上光晴作品集 第二巻』（前掲）に拠った。

（かじお ふみたけ／神戸大学大学院人文学研究科准教授）